

# Encourage & Company

皆さんこんにちは。  
エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点でシリーズとして書き綴っています。

第1回目は「牛耳る」という言葉についてお話ししました。

第2回目は「鳴かず飛ばず」。

第3回目は「司馬懿仲達」について。

第4回目は「我れ鳥獣にあらず」。

第5回目は「国士無双」「狡兎死して走狗煮らる」。

第6回目は「鼓腹撃壤」。

今回第7回目は、とりとめのないお話をしようと思います。

日本の相続は民法上相続権は生まれた子供が平等に持ち、慣習的に長子相続（財産・家督・地位を長男が相続する）が多いですが、法律上は長子相続と規定されていません。

民法を学習した時、生まれてくる順序によりその子供の権利に差異があってはならないと教えられ、そのとおりだなと思いました。

古代中国でも別に長子相続というルールがあったわけではありませんが、皇帝はほとんどのケース長子相続をしています。私の仮説ですが、皇帝の後継ぎは“絶大な力”を相続するわけですからその後継ぎをうやむやにしておくとは絶えずお家騒動が起き、そうならないようにあらかじめハッキリさせておく工夫が慣習化したのかなと思います。

だがしかしそれは平和な時代が続けばの話で、皆さんご存じのように常に動乱の時代だったわけです。

殷周伝説・史記・項羽と劉邦・三国志を読むにあたり私は全く知らない言葉と言うか概念があり、それを理解することで更に読み物と人生の理解が深まりました。

それは「外戚（がいせき）」という言葉です。

# Encourage & Company

皇帝の親戚ではなく、皇后（お嫁さん）の親戚という意味です。  
先程の”絶大な力” はなにも皇帝の息子達（内戚）だけが狙っているのではなく、  
外戚も狙っているわけです。

端的に言えばこうゆうことです。

通常皇帝は武力と知力と徳で国を興し、群雄割拠から頭角を現し  
激戦の末中国を統一する最も優れた DNA を持っているわけです。

一方、皇后は皇帝に等しく優れているかということ、必ずしもそうではなく、  
単に美しかっただけの場合もあるわけです。

この点、外戚である皇后の兄や弟や父にしてみれば千載一遇のチャンス到来なのです。  
自分は皇帝ほどの DNA を持ち合せていなくても妹や姉や娘が皇帝に嫁いだけで  
場合によっては自分が皇帝になれるチャンス、”絶大な力” が手に入るのですから。

三国志に出てくる何進（かしん）なんて男はまさに上記の良い例です。

霊帝の皇后の兄ですが、もともと屠殺業者（家畜を殺す仕事）です。

それなのに妹が皇帝に嫁いたら一気に後漢の大將軍(日本史で言えば征夷大將軍)  
になってしまいます。

また項羽と劉邦に出てくる呂后は劉邦の皇后ですが「中国三大悪女」の一人です。

劉邦は前漢の要職を内戚で固めます。しかし劉邦の死後、呂后は劉邦の内戚を次々に殺害  
し、自分の親戚を要職につけます。

日本では平安時代の摂関政治が有名です。

これも天皇家ではない藤原氏が幼少天皇に代わり実質の”絶大な力” を握るわけです。

要は藤原氏は天皇家の外戚です。

3つ事例を挙げましたが、長い歴史の中では外戚が”絶大な力” を握る期間は短いです。  
やはり実力で中国を統一する最も優れた DNA を持ち合わせていないからだとは私は解釈し  
ています。

私自身が外戚を気にするぐらいの”絶大な力” を持つことになるかは不明です。

お読み頂いている方の中には大資産家であったり経営者であったり

”絶大な力” をお持ちの方がいると思います。

奥様には内緒で外戚について考えてみてはいかがでしょうか。

堀 洋三